

1 研究テーマ

聴覚障がい児の肯定的な自己概念の形成とその支援について

2 はじめに

聴覚障がいは「わかりにくい」障がいといわれる。「きこえにくさ」について、もっと客観的に把握する方法を探りながら、生徒が自己のニーズを適切に表現できるような支援について考えたい。

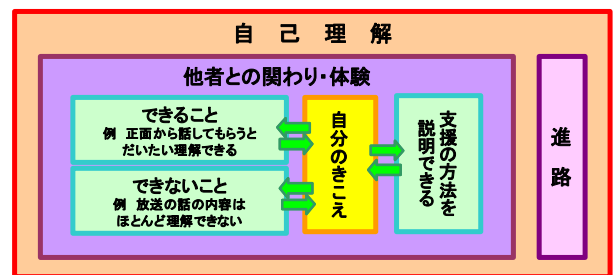
3 研究目的

聴覚障がい児を取り巻く現状と進路を見据え、卒業後の積極的な社会参加をめざした聾学校における教育(特に高等部)をさぐる。

<研究仮説>

聴覚障がい児が自分のきこえについて知り、きこえにくさに基づく不利益や不便に対処する方法を学ぶことは、より積極的に適切な社会参加を支える肯定的な自己概念の形成につながる。

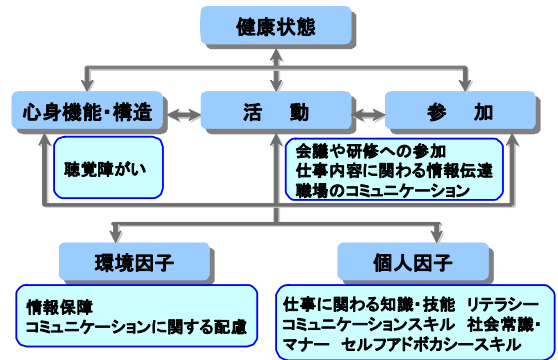
生徒が自分のきこえをきちんと受けとめ、把握し、自分のできることとできないことがわかり、それらを人との関わりや体験の中で自分のものとし、支援の方法を説明していけるようにする。さらに他者との関わりや体験の中で実感していくことにより、自分の障がいを理解し、自分を理解していくことになる。特に高等部の生徒は卒業後の進路を考える時期であり、将来とつなげて考えることでより自分と向き合う。うまくつながっていくことにより、きこえない自分に自信がもて、肯定的な自己概念の形成につながると考える。



肯定的な自己概念の形成
卒業に向けての課題

<研究の背景>

聴覚障がいの場合、障がいに起因する活動制限・参加制約として会議や研修への参加や仕事内容に関わる情報伝達の制限・制約が考えられる。しかし、周囲の理解と対応(メモや手話通訳による情報保障等、コミュニケーションにおける配慮)があることで制限・制約が減少し、なくなることがこの構造からみることができる。また聴覚障がい者の個人因子も関わり、相互に関連・機能することがよみとれる。環境と個人との関わりから負担のない効果的な取り組みで活動・参加ができると考えられる。



ICF(国際生活機能分類)の相互作用モデルより

コミュニケーションスキルやセルフアドボカシースキルを高めることにより、障がい者個人が環境に関わっていき、より積極的に社会参加をしやすくすることが考えられる。自分のきこえについて説明する力と、支援の方法について説明する力を高めるというねらいをもち、研究を進めたい。

4 研究内容

(1)実態把握

自己評価を10の項目、それぞれの項目に5の評価内容を設定し、実施(右表)。

自己評価の結果をもとに個別に自己評価アンケート(記述式)を作成し、実施。

それらをもとに個別にききとりを行う。

(2)きこえに関する検査

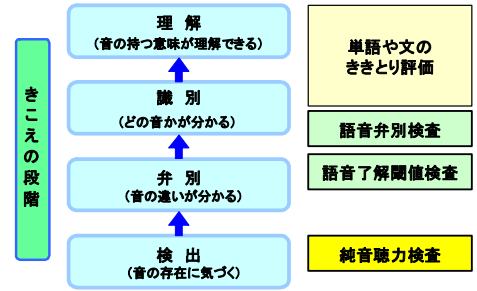
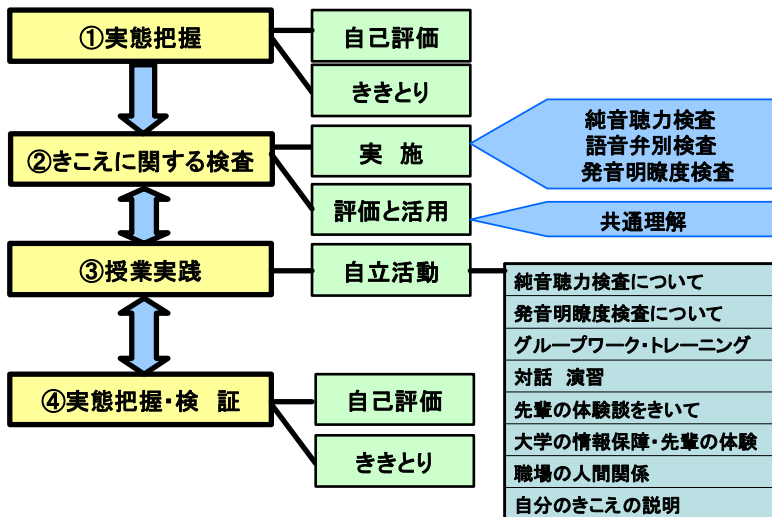
- ・純音聴力検査
- ・語音弁別検査
- ・発音明瞭度検査

自己評価<項目>	<評価内容>
健康の保持	
聴力の把握	平均聴力の計算ができる
補聴手段の自己管理	現在の自分の平均聴力がわかる
聴覚活用	オーディオグラムの読み方がわかる
発音・発語	聴力の変動を意識している
手話	自分の聴力について説明できる
集団活動での積極性	
聴者とのコミュニケーション	
自己の肯定的評価	
社会自立・進路・学習	

(3) 授業実践 自立活動の授業実践

(4) 実態把握・検証 再度自己評価を実施。実態を把握し、変容について検証する。

<研究方法>



きこえに関する検査
 きこえの段階は音の存在に気づく『検出』の段階がまずあり純音聴力検査によって行う。次の『弁別』の段階は音の違いがわかる段階。『識別』になると音の判断がつき、どの音かが分かる段階。「あ」が「あ」だとわかる)そして音の持つ意味が『理解』できる段階になる。

5 研究のまとめ

(1) きこえに関する検査について

数値だけではその生徒のきこえを把握することはできないが、データを客観的にとらえ、どのように解釈していくかを自己評価と合わせて高等部教員で共通理解を深めながらみていくことに意味があったと考える。生徒が障がい認識を深めていくときに、周囲の人々の障がい理解が大きく影響する。教師一人の主観的なとらえ方に偏らないようにするためにも、客観的データを用いて教員間で共通理解を図ることは、重要だと考える。

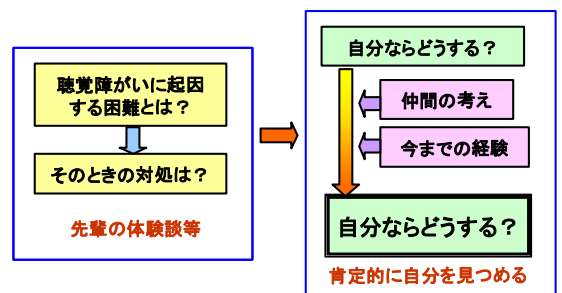
生徒は、自分のきこえをとらえることが将来を考えていくうえで必要なことであると感じたとき、検査の結果に興味をもつ。その結果に対し、ショックや期待等をもつことが予想されるが、それを教師が受けとめ、将来の社会参加をイメージしながら、情報を提供し、ともに考えることで生徒は成長するのではないかと思う。

(2) 自己評価の活用について

自己評価を活用し個別に対応することで、生徒は一年の間に大きく揺れ動き変容することがわかった。生徒の実態把握をするために自己評価を実施し、そこで自己決定の機会等その手立てを準備することが次のステップであり、生徒が卒業するまでのニーズがあるのではないかと考える。

(3) 先輩の体験談・卒業生の現状から学ぶ

同じ障がいのある社会人の姿として、障がいに起因する困難にどのように向い解決したのか知ることは自分の将来像を描く大きな手がかりになる。社会参加のイメージにつながる職場体験学習での体験とつなげ、自己分析や個人的体験の共有を行っていくことで、困難な状況に適切に対処していく能力を育てていくことができると感じた。



6 今後の課題

自己評価やきこえに関する検査についてもっと使いやすく、生徒理解に活用できるものとなるようさらに検討していくことが必要である。そしてそれをいかに解釈し、活用していけるかは、幅広い専門性が必要であり、今後も研修していかななくてはならない。校内での連携を深め、協力して生徒にかかわっていく必要がある。

7 おわりに

実態把握、ニーズ把握をするためには、「きこえにくさ」について深く知ること 一人の人間として育てていくこと 積極的な社会参加をめざし、その姿を想像することが必要である。そして、高等部の段階であれば、その実態を教師がしっかり受けとめいっしょに考えていくことなのではないかと思う。それにより社会参加を目の前にし、揺れ動く生徒の自己概念の形成を肯定的なものに導いていくのではないだろうか。今後も実践・検証を重ねていきたい。

先輩の体験談をきいて...生徒の感想
 私も先輩と同じで、みんなと違って、聞こえない自分が嫌でした。でも、聾学校に入り、聾の仲間たちと出会い、新しい発見をたくさんして、聞こえない自分を受け入れられるようになりました。
 先輩の言うとおりで、助けてくれるのを当たり前だと思わずに、常に感謝の気持ちを持つことが大切だと思いました。
 待つのではなく、自分から積極的に行動していかなければいけないと思いました。